

序 世界的概観 27

問題の設定 29 / 量的変化と統計 29 / 地理的分布 33 / 博物館の法的地位  
博物館の創設者 36 / 建設ブームの時代 38 / 博物館建設のダイナミズム 41  
博物館の分化・専門化 42

第Ⅰ部 個人コレクション 三つの誕生物語 45

1 宝物の時代——墳墓、寺院、宮殿 47

宝物と聖なるもの 47 / 宝物庫の機能 48 / 宝物庫の本質的特徴 55 / ギリシャの都市の宝物  
ヘレニズムの王たち 60 / ミュウズの神殿ムセイオン 64 / ペルガモンのアッタロス 66

ローマの公共コレクション 68 / 私的コレクションと公開 70 / 博物館のモデル 73

2 中国とローマ——個人コレクションの二重の起源 77

大陸の東と西の帝国 77 / 個人コレクションの誕生 77 / 仮面とアトリウム 78  
略奪と戦利品 79 / 蒐集家の出現 82 / キケロが見たベレス 84 / 個人コレクションの発明  
ローマ人の蒐集家 89 / プリニウスとアウグストゥス 91 / 豪華な時代 97  
ローマからコンスタンティノープルへ 99 / 皇室の宝物庫 100 / 神聖化と聖遺物 103

3 キリスト教徒の宝物——金と恵み 107

蛮族の王たちの宝物——キリスト教化とローマ化 110 / ラテン語によるテキストの登場 112  
カール大帝と教会宝物——信仰の輝き 114 / シュジェの態度と行動 118  
コンスタンティノープルの皇室財宝 123 / 第四回十字軍とその影響 128  
カメオとインタリオ 130 / 一三〇四年以降のキリスト教の財宝 139

4 個人コレクションの復活 147

シャルル五世とベリー公ジャン——宝物から個人コレクションへ 147  
ペトラルカと人文主義者の蒐集物 153 / ニッコロ・ニッコリのコレクション 156  
蒐集家の三王朝——ゴンザーガ、エステ、メディチ 162 / アルフォンソ五世 164 / ローマ教皇庁  
フィレンツェの衰退 170 / コレクション、個人、栄光 171 / 人文主義者の果たした役割 174

5 古代遺物への反応 185

- ローマー——博物館の誕生 185／ラテラノ宮殿、バチカン、カピトリウム 190  
 シクストゥス四世 193／彫像とベルヴェデーレの中庭 196／異教徒の偶像と裸体像 200  
 コモ——偉人博物館 204／博物館という用語の登場 206／「ムゼウム」の適用範囲 208  
 意味の変化 212／イギリスの「ミュージアム」という用語 214／フランスの「ミュゼ」 214  
 オランダ語とドイツ語の「ミュージアム」 215／ロシア語とポーランド語 217  
 最初の美術館——フィレンツェ、ベネチア、ミラノ 218／ウフィツィ美術館 219  
 ベネチアのドメニコ・グリマーニ枢機卿 226／フレダリーコ・ボッロメオ 231

6 衰退と古代の美術品への回帰 241

- 植物園、生きた植物博物館 241／アルドロバンディの博物館 250／自然史博物館の誕生 251  
 キルヒャーの博物館 252／百科全書的コレクション 258／科学と古代の関係 260  
 スキピオーネ・マッフェイの博物館 266／碑名学博物館とエトルリア 268／カピトリノ美術館 273

7 古代美術の勝利 279

- 芸術の殿堂——ポルティチ、カポディモンテ、ピオ・クレメンティーノ 279  
 ポルティチ博物館 282／ヘルクラネンセ博物館 286／カポディモンテ絵画館 287  
 クレメンス一四世とヴィンケルマン 288／ピウス六世 294  
 ウフィツィ——啓蒙主義が見直した王侯貴族のギャラリー 303／コレクションの法的保護 304  
 ベリとランツイの確執 308／新しい展示基準 312／歴史を語る 315／マンシニア制度と入館券 319

第Ⅳ部 アルプス越えの旅 一六世紀から一八世紀まで 321

8 絵画と古代の美術品 331

- ブルゴーニュ公爵家——宝物と個人コレクションの狭間で 332／カール五世周辺の蒐集家 336  
 フロンズ像と絵画に囲まれたフランソワ二世 340  
 スペインのフェリペ二世とオーストリアのルドルフ二世——信心深さと好奇心 348  
 ルドルフ二世 354／ヴィッテルスバッハ家——王朝に仕えたコレクション 358  
 マクシミリアン一世 359／三十年戦争とヨーロッパにおける美術品の再分配 362

9 好奇心の部屋 クンストカンマー 369

- クンストカンマーの特異性——眩惑、驚愕、娯楽 370

クンストカンマー、その理論化——キツェベルク 373  
カトリック宮廷Ⅰ アンブラス——謝罪と遊び心に溢れた百科事典 378  
カトリック宮廷Ⅱ ミュンヘン、好奇心から献身へ——プラハ、好奇心文化の絶頂期 384  
プロテスタント宮廷Ⅰ——カッセルとドレスデン、物の新しい秩序 388  
プロテスタント宮廷Ⅱ——ベルリンとコペンハーゲン、博物館への道 396  
コペンハーゲン 397／サンクトペテルブルク——ロシアのクンストカメラ 401

## 10 自然史——陳列室から博物館へ 405

オランダ——異国的なものと非常に身近なもの 407／アムステルダム植物園 408  
ヤン・スワメルダムの昆虫標本 410／フレデリック・ルイシュの解剖学的標本 411  
ゲオルク・エヴァーハルト・ルンフィウスの海洋生物 411  
イギリス、フランス、ヨーロッパ——流行、農村経済、神学の狭間で 414  
アシユモレアン博物館 416／科学と宗教の次元 419／自然史博物館——啓蒙主義の一施設 422  
ビュフォンとバリの王立植物園 424／大英博物館とハンス・スローン卿 429／自然史博物館の設立 431

## 11 美術館へ向けて 437

イギリス国王チャールズ一世とその側近たち——絶対主義貴族の特権としての芸術 437  
売却されたコレクション 440／フランス——王室コレクションから美術館へ 442  
コレクションの質的变化 444／新しい紳士像 446／公衆と公共性の概念 451  
ミュゼとギャラリー 452／イギリスにおける美術の興隆 454

スペイン継承戦争の影響——オランダとそのほかのヨーロッパ諸国 457  
スウェーデンとデンマークの王侯貴族 458／紳士像と騎士道学 459  
華やかなザクセン——作品、建物、公衆 461／フリードリヒ二世 469  
王侯貴族の絵画・古代美術のカタログ 471／コレクションの開放 472  
美術館の絵画作品吊り下げの新原則 477／「除外の原則」と美的原則 478

訳者あとがき 水嶋英治 488

図版出典 503

参考文献 544

原注 609

博物館・美術館の関連地名・施設名索引 612

人名索引 620

続刊の概要 621



解説

## 日本語版刊行に寄せて——本村凌二

(歴史学者〈古代ローマ史〉・東京大学名誉教授)

大学の教壇に立つようになって以来、およそ四〇年近く夏季休暇は渡欧生活を送るようになった。一〇日ほどは地中海周辺の古代遺跡の調査旅行に出かけるが、残りの三〇日余りはロンドンで過ごす。ロンドン大学のギリシャ・ローマ研究所付属図書館には数十万冊に及ぶ古代史関係の史料・文献・学術誌が収蔵されており、よく整理されているので、実に利用しやすい。

しかも、大英博物館には徒歩三分の場所にあるので、昼休みの一時間弱を使って観覧できるという気安さがある。もうのべ数百回は観ているから、ちょっとした玄人並みの通(笑)でもある。ここは展示物の解説が詳細極まるので、丁寧に読んでいと短時間では一部屋か二部屋かしこ回れない。それでも、何度も通覧したことになるから、まさしく継続は力なりであろう。博物館のコレクションは古い時代の装飾品だったものが多い。だから、お金持ちか好事家の嗜好にあった品々が残されている。だが、個人や家族の収集保存では、幾世代も続くものではない。だから、数百年も経てば、おのずから「公共」の展示機関が必要になるのは必須だった。

古代までさかのばれば、博物館(ミュージアム)の語源になるムーセイオンがエジプトのアレクサンドリアに創建されてい

る。アレクサンドロス大王は征服地の獵師、漁師、農民が使う道具や珍しい動植物を集めて師アリストテレスに送っていたというし、アリストテレスは父からの相続財産で書物を収集していたらしい。そもそも標本と書物を集めるなどは、当時としてはとてつもなく画期的なことだったのだ。

このような由来があるにしても、「公共」の展示機関としての博物館の歴史をめぐって、しかも世界史的規模で調査して集大成したのが本書である。もちろん世界でも最初の試みであるから、本書の意図するところは世界史理解に一石を投じることが間違いない。

「第I部 個人コレクション 二つの誕生物語」の中では、中世にあつては宝物が教会に集積しがちだったのに、やがて時代に応じた変化が現れる。とりわけ、一四世紀後半から一五世紀にかけて、富と知識のふたつを兼ね備えた人々が、どこよりもフィレンツェに集中していたのは決して不思議ではない。商工業が発展し安定したフィレンツェは、学者や芸術家に類まれなる生活基盤をもたらしていた。ジョットやダンテはフィレンツェの栄光になり、ほどなくポッカッチョが大きな役割を果たした。やがてメディチ家の人々が登場し、コレクションが大幅に

増えて、のちにはさまざまな博物館にそれらが収蔵されている。「第II部 イタリアの博物館・美術館 一五世紀から一八世紀まで」では、われわれになじみの近代の博物館が語られている。しかも、嬉しいことに、劈頭<sup>へきとう</sup>を飾るのがローマのパラッツォ丘にあるコンセルバトリー宮殿である。今日ではカピトリノ美術館の名で親しまれているが、とりわけ名高いのが双子の兄弟を育てたという牝オオカミ像で、衆目を集める。

博物館あるいは美術館の理念はイタリア中に浸透し、なかでもフィレンツェ、ベネチア、ミラノには今日まで継承されるムセオがある。フィレンツェのウフィツィ美術館は、メディチ家のコレクションを中心に、一九―二〇世紀にかけて諸教会やアカデミア美術館から移管された絵画、購入や寄贈された作品などからなり、後期ゴシックからルネサンスを経てマニエリスム、バロックにいたるフィレンツェ派絵画の展開が次々と目の前に広がり圧倒されそうになる。

「第III部 アルプス越えの旅 一六世紀から一八世紀まで」になると、博物館がヨーロッパ中に拡散して広まる今日の風景に近づく。なんとといっても、私には大英博物館になじみがある。なにしろ入場無料はすごいが、多くが世界中から持ち込んだものだから、せめての罪滅ぼしという観方もある。ここが世界一の収蔵といわれるのも、八〇〇万点も蓄えているのだから、当然だろう。そのうち展示されているのは、八万点に過ぎず、一

〇〇分の九九が地下に保管されているという。最近のニュースによると、それら保管資料のうち二〇〇〇点<sup>〇〇〇〇〇</sup>が盗難されてしまっているというから、保管・管理の仕事もたいへんなものだ。気の毒になる。ここを訪れると、私が必ず表敬訪問するのが「ウルスタンダード」と呼ばれる貝と石のモザイクが見事な軍旗である。色鮮やかで、とても四五〇〇年前のものとは思えない歴史の深さを感じさせるのだ。

もうひとつは、やはりパリのルーブル美術館である。「ミロのヴィーナス」や「モナリザ」は誰でも知っているだろうが、私が必ず会いに行くのが「リウイア像」である。ローマ皇帝アウグストゥスの妻の顔<sup>かほ</sup>を模った彫像だが、なんとも可愛らしく自分好みなのである。つい、アウグストゥス帝と私の好みは似ていると思いたくなるのだ。

ほかにもヨーロッパを旅すると、小さな地方都市にも、すばらしい芸術品を並べた美術館に出会う。シチリア島のアグリジエント国立考古学博物館にある巨大な人間柱は圧巻であり、見事なギリシア美術品があつたため息が出そうになる。ここでは触れなかった地方都市の博物館・美術館も数多いが、それらとの出会いは人生の得がたい経験になることは間違いない。それは人生の財産になること請け合いです。





(上) [口絵5-1/図62] ベニーニュ・ガグネロー「スウェーデンのグスタフ3世とバチカン美術館を訪れた教皇ピウス6世」、1785年 (Nationalmuseum, Stockholm)  
(下) [口絵5-2/図63] ヨハン・ゾファニー「ウフィツィ美術館」、1772-77年 (Royal Collection Trust, London)